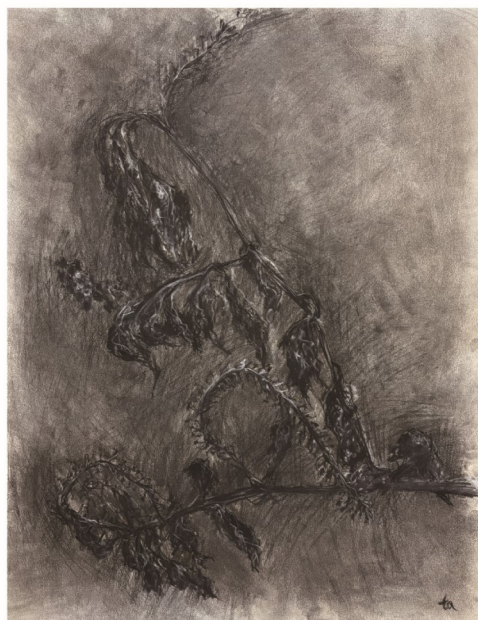
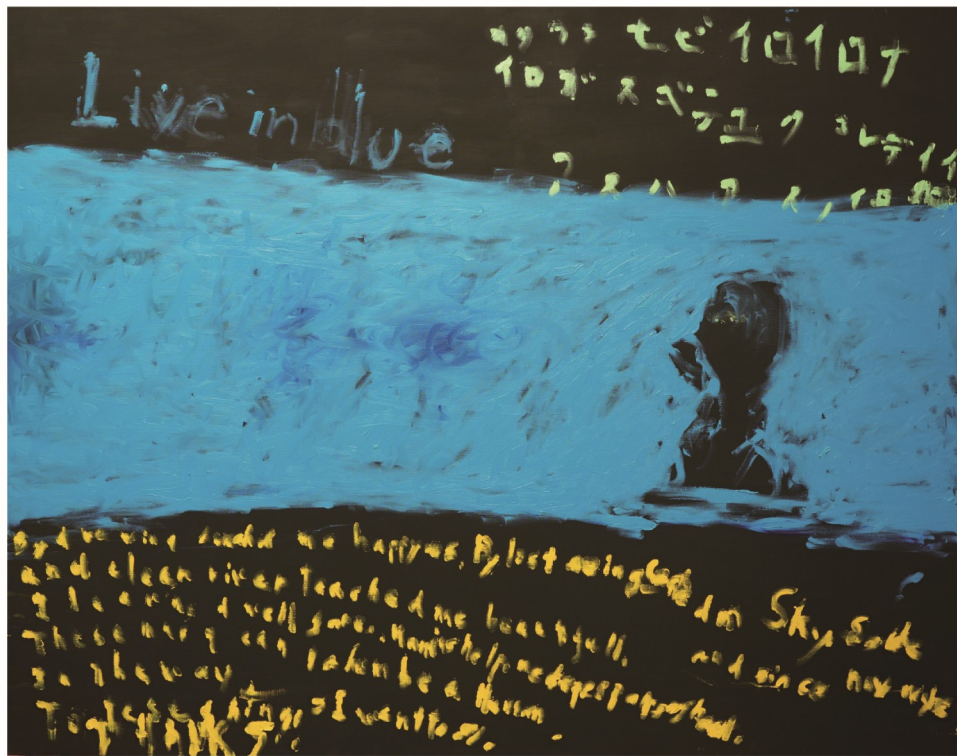




第31回 “癒し”としての自己表現展 —心の杖として鏡として—

1990年初頭以来、作品の発表の「場」として〈造形教室〉のメンバーが自主的に準備や展示、運営を行い、毎年開催してきた「癒し」としての自己表現展」。

“街の中で作品展を”という意図のもとに始められた本展は、病者や障害を持つものへの理解や同情といった多数者の立場、段差を超え、それぞれが自分自身の生き方を見つめ直す、かけがえのない場・関係性を求め、試行し続けてきました。

“パッション＝受苦受難・情念情動”から生み出され、自らを癒し支える自己表現の活動は、困難な現代社会を生きる人々にとって通底・協働する問題を逆照射しているとはいえないでしょうか。

「生きる」とは何か…、「病む」とは何か…、「表現」とは何か…、今回もアートを通じた交感、交流の「場」となることを希（のぞ）んでおります。

平川病院〈造形教室〉



左上より
『Live in blue』本木 健
『列に並びし人影』森 隆敏
『花に見つめられて』石倉 真理

中央
『不安と苦の解放』杉本 たまえ
『猿蟹終戦』或馬 次郎

右上より
『彼方』暮田 美和
『建設のシンフォニー』山崎 雄作
『デッド・シグナル』大森 英明